

氏 名	守 屋 光 雄 もり や みつ お
学位の種類	文 学 博 士
学位記番号	論 文 博 第 122 号
学位授与の日付	昭 和 53 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	乳幼児保育の基本的状況 (保育学の成立基盤)

論文調査委員 (主査) 教授 柿崎祐一 教授 本吉良治 教授 池田義祐

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文の意図するところは、乳幼児保育のおかれている基本的状況を分析して、その実態を明らかにし、そこから、発達心理学の研究を軸として、従来、科学としての独自性および体系づけが不十分であった“保育学”の構築への足がかりを得ようとするものである。まず序章では、従来あいまいであった「保育」の概念を明確にしている。それは、「保育」を「教育」と対立した概念として捉えるのではなく、「乳幼児の発達を保障するための教育」として考える。その意味で、「保育学」とは心理学、社会学、社会福祉学、保健学などの近接各領域とのかかわりの中で、より多面的、有機的、統合的にとらえられた「乳幼児教育学」であるといえる。

このように、保育＝乳幼児教育という捉え方をすれば、わが国におけるような、幼稚園と保育所との二元化は、保育制度からも、内容からもあり得ないことになる。そこで、本論、第1章では、近年における世界の保育動向を展望することによって、わが国のおかれている保育の基本的状況を明らかにし、保育界における今日的課題についても論及した。諸外国とわが国の保育動向を比較すると、前者では保育制度が一元化されているところが多いのに対して、後者では保育所（託児所）と幼稚園との歴史的変遷の相違が依然として改められず、二元化の状況が存続している。このようなわが国の保育界のもっている問題点を明確にした上で、保育の一元化が提唱された。それは、既存の幼稚園と保育所の基本的性格を止揚して、新しい保育体制を創造することを志向するものであり、決して既成の幼・保の体制を前提とした保育所の幼稚園化でも、幼稚園の保育所化でもない。それは、幼稚園と保育所との固定概念を棄却して、子どもの発達保障と保育者の研修権と母親の労働権（育児権）とを三立させる保育体制を創造することを目標とするものである。

このような観点のもとに、第2章では、発達初期の社会的環境を重視する立場から、独自の発達段階区分を試み、発達理論を展開しているが、かかる重要な発達初期にある乳幼児の発達を保障するための環境条件を分析する中で、家庭保育と集団保育の問題がさらに第3章においてとりあげられる。

子どもを歴史的・社会的存在として捉えるならば、子どもの発達には家庭、集団、社会の諸条件によって補完または規制されるものであるから、三者または二者択一的に是非を決することはできない。いずれの保育も子どもに必要であり、いずれにも共通するものと夫々独自の特徴とするものがある。いずれが重要であるかということよりも、その目標、内容、方法が子どもの発達を保障するのに適切であるか否かを問題にすべきであることが、集団保育においてしばしば問題となるホスピタリズムとの関連において論じられている。

第4章では、0歳児、3歳未満児及び3歳以上の幼児の各群について、保育の状況、保育者及び保護者の保育意識などについての調査結果をもとにして、集団保育の効果と残された問題点が指摘される。また、第5章では、いわゆる長時間保育をめぐる状況が分析され、長時間保育を必要としない体制づくりが提唱される。

ところで、集団保育効果を期待し、子どもの発達を保障するための保育内容、方法として、ここでは自発的、集団的活動を中心とする「遊びの保育」が重視される。そこで、第6章では、遊びに関する諸理論や遊びの発達について論述し、さらに、空間的にも、時間的にも遊びを奪われた現代の子どもたちの実態を明らかにし、彼らに遊びを取り戻すための諸条件が分析され、さらに第8章では、この「遊びの保育」を基盤として著者たちが行いつつある保育の実践について述べられている。

乳幼児の身心の発達については、参考論文として提出されている別稿「発達心理学」などに詳述されているので、本論文では、第7章において、著者が乳幼児について行なった観察や実験と津守真たちの乳幼児の領域別発達に関する研究を中心に概説されている。また、知能一とくに知能テストの功罪について、第9章で述べ、従来の知能観、IQの恒常性なども批判し、知能テストの本質をただし、その過信および濫用について警告している。

終章である第10章では、本論文の総括的な意味も含めて、既に述べてきた著者の立脚する「発達観」や「児童観」は、障害児についても共通するものであり、彼らの発達の可能性を否定するような「発達観」や、能力の異常性のみを強調して、彼らを疎外、差別する如き「児童観」は肯定できないことが強調されている。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、わが国における乳幼児保育と幼稚園教育とが歴史的・社会的諸要因に規定されて二元的に分離されている状況について、乳幼児心理学的ないし発達心理学的観点から分析し、そこにさらに保育の実践における著者の体験と各種の調査資料とに基づく考察を加えることによって、一つの総合的科学としての保育学の成立基盤を明らかにしようとしたものである。

著者はまず、保育と教育とは二元的に捉えられるべきものではなく、保育とは即ち乳幼児教育でなくてはならず、その目的は自主的・創造的な人間性の育成にあるとする立場から出発し、諸外国との対比におけるわが国の保育活動の実情、家庭保育と集団保育との問題、いわゆるホスピタリズムの問題、遊びの問題などについての実証的研究と論考とを数章にわたって展開している。これらはそれぞれ傾聴すべき内容を持つものであるが、さらにそれらの論考が精神発達に関する著者自身の心理学的見解に裏打

ちされていることはいうまでもない。ただし、本論文は、著者の多年にわたる研鑽と実践との成果を集約した著書（保育学原論，昭和51年，朝倉書店）に若干の加筆・修正を施して提出されたものであって、そのため各章の叙述はやや簡にすぎ、これのみでは内容を十分に理解・評価し難いきらいがある。しかし、その点は参考論文として提出された別著「発達心理学（昭和45年，朝倉書店）」その他の資料によって補われており、全体として著者の業績の学術的意義と価値とを高く評価することができる。

総じて、著者の論旨は、ともすれば二者択一的に論議されやすい諸問題，例えば集団保育か家庭保育か、遺伝か環境かなどの問題について、そのような二肢性をいわば止揚したところに真の発達課題と保育の方策とを見出そうとするところにある。これは一見平凡な論旨のようではあるが、実践的には必ずしも容易なことではない。本論文は、著者自身及び他の研究者たちによる豊富な実証的資料をふまえてそのような実践にかかわる問題を多く提起している点で、重要な意義をもつであろう。

さらに、保育とは如何なるものであるべきかに関して、著者が重視しているのは、保育者及び保護者のもつ保育に対する意識の実態であり、それについての調査の結果は、「施設の充実」や「保母の定員増加」などの次元では解決し難い重要な問題の所在を示唆するものとして注目すべきである。

心理学にとっても、究極の課題は、歴史的・社会的現実の諸相を超えた普遍的法則の発見にあることはいうまでもない。しかし、その半面、特に心理学は、人間生活の現場の実態と常に結びついていなくてはならないという性格をも持っている。その意味において、本論文は心理学のよって立つべき現実的基盤の一断面を呈示することを通じて、人間性ないし精神の発達の志向すべき課題を明示し、発達を規定する現実的諸要因の相互連関の解明への貴重な示唆を与えるものとして評価されてよい。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。